長野市の埋蔵文化財第172集

浅川扇状地遺跡群

北 浦 田 遺 跡

ヒルズガーデン稲田一丁目分譲地造成工事 および 稲田一丁目個人住宅新築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024年 3 月

長 野 市 教 育 委 員 会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第172集として刊行いたします本書は、ヒルズガーデン稲田一丁目分譲地造成工事 および 稲田一丁目個人住宅新築工事に伴って実施した、浅川扇状地遺跡群に属する北浦田遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、古墳時代前期・後期の集落跡および弥生時代中期から古墳時代前期にかけて埋没した自然地形の落ち込みなどが見つかりました。この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和６年３月

長 野 市 教 育 委 員 会

教育長　丸山　陽一

例　言

1　本書は、「ヒルズガーデン稲田一丁目分譲地造成工事」および「稲田一丁目個人住宅新築工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。本書ではそれぞれ「分譲地地点」「個人住宅地点」と呼称する。

2　発掘調査は、ミサワホーム甲信株式会社 代表取締役 芹澤剛（分譲地地点）および 個人（個人住宅地点）と、長野市長 荻原健司 との間で締結された「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）が実施した。

3　発掘調査の概略は以下のとおりである。

調査地点名（略記号）	所在地	調査面積	調査期間	整理調査
分譲地地点（AKU１）	長野県長野市稲田一丁目30番42・43・44号	170m²	令和４年11月24日～12月12日	令和５年度
個人住宅地点（AKUKY）	長野県長野市稲田一丁目30番42号	42m²	令和４年４月13日～20日	令和５年度

4　本書の編集・執筆は清水竜太が担当した。

5　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター所管）で保管している。

凡　例

1　本書は、調査によって確認された遺構・遺物のうち、時期の明らかなものを中心に報告した。

2　遺構図の方位は座標北を表している。

3　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138° 30′ 00″、北緯36° 00′ 00″）の座標値（日本測地系2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。

4　遺構名は次の略記号を用いて表記した。竪穴建物跡…SB、溝跡…SD、土坑…SK、小穴…SP

5　遺構実測図・断面図は、１/20で作成した原図をもとに１/80で掲載した。

6　遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに土器１/４、土器断面・土製品１/３で掲載した。

7　遺構写真・遺物写真の縮尺は任意である。

8　土器実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、　は赤色塗彩、　は黒色処理の範囲を表す。

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯……1
　第１節　調査の契機と事務経過……1
　第２節　調査の経過……1
　第３節　調査体制……4
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……5
　第１節　遺跡の立地……5
　第２節　周辺の遺跡……5
第Ⅲ章　調査成果……7
　第１節　調査の概要……7
　第２節　遺構と遺物……9
　第３節　まとめ……12
写真図版

【挿図目次】

図１　調査地位置図（広域）……2
図２　調査地位置図（詳細）……3
図３　調査範囲図……3
図４　周辺遺跡位置図……6
図５　基本層序……7
図６　調査区全体図（広域）……7
図７　調査区全体図（詳細）……8
図８　SB１実測図・出土遺物実測図 ……9
図９　SD１・SD２断面図・SD１出土遺物実測図…10
図10　落ち込み断面図・出土遺物実測図……10
図11　遺構外出土遺物実測図……11
図12　遺構外出土遺物実測図……11
図13　工事立会い写真……11

【表目次】

表１　遺物観察表……12

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査の契機と事務経過

調査地は長野市北部の若槻地区に所在する（図１）。若槻地区は、かつては旧北国街道沿いを中心に集落が広がる農村であったが、1970年代から1990年代にかけて県道長野荒瀬原線や都市計画道路北部幹線などの整備が進み、現在は宅地化・商業地化が著しい地域となっている。

分譲地地点　住宅街に囲まれた県道沿いの一画に総事業面積1,438.43m²の宅地造成事業が計画された。令和３年６月９日、これに係る埋蔵文化財包蔵地の照会が長野市埋蔵文化財センターにあり、照会地が浅川扇状地遺跡群の範囲内に位置することから、埋蔵文化財の保護に関する手続が必要となる旨を回答した。その後、令和４年１月11日付で文化財保護法第93条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」を受理し、同月19日付３埋第２-366号において「発掘調査」の保護措置を指示した。

試掘調査は２月15日に実施し、事業地で標高の最も高い中央付近とやや低くなった現道に近い東寄りの２箇所に試掘坑を設定した。この結果、中央では地表下70cm、東寄りでは同40cm で遺物包含層を確認し、その下層を掘り込む溝跡・小穴を検出したことから、２月17日付３埋５-32号にて事業主体者にその旨を報告した。この後埋蔵文化財の保護協議を進め、開発道路部分約347m²を保護対象に、西側については記録保存を目的とした発掘調査、隣接建物への影響が懸念される東側については工事立会いを実施することで合意した。

その後、11月22日付で「埋蔵文化財の保護に関する協定書」および「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、現地における発掘調査を11月24日から12月12日まで19日間実施した。また工事立会いは、調査終了後の12月21日・１月16日・２月２日の各日に実施した。令和５年３月10日には変更契約を締結し、その後３月15日付で当該年度分の業務を完了して実績報告書を提出した。

個人住宅地点　上記開発道路の北側に位置する、分譲地造成地の地主宅が工事に先立ち建て替えられることになり、令和３年２月22日に埋蔵文化財包蔵地に関する照会があった。分譲地地点に伴う試掘調査の結果から照会地における埋蔵文化財の包蔵は明らかであり、また外構工事に伴い切土造成が行われる計画であったことから、文化財保護法第93条の規定に基づく届出の提出を要請した。そして同月24日付でこれを受理し、同月31日付３埋第２-464号において「発掘調査」を指示した。保護対象地は、現道に接して造成される駐車場部分53m²である。発掘調査は４月13日から20日まで８日間実施した。

両調査地点に関わる発掘調査報告書作成のための整理作業は令和５年度に実施し、令和６年３月に本書を刊行してすべての保護措置を終了した。

第２節　調査の経過

分譲地地点

令和４年

11月24日（木）　器材搬入。表土掘削（～25日）。

11月28日（月）　作業員雇用開始。遺構検出・掘り下げ開始。

12月７日（水）　航空写真撮影。全体写真撮影。測量。

12月８日（木）　結線。落ち込み内堆積土の重機掘削。

12月９日（金）　落ち込み調査、測量。作業員雇用終了。

12月12日（月）　器材搬出。

12月21日（水）　Ｌ型擁壁設置に伴う工事立会い。

令和５年

１月16日（月）　Ｌ型擁壁撤去に伴う工事立会い。

２月２日（木）　路盤工およびＵ字溝設置に伴う工事立会い。

個人住宅地点

令和４年

４月13日（水）　器材搬入。表土掘削。遺構検出・掘り下げ開始。

４月20日（水）　全体写真撮影。器材撤収。

図１　調査地位置図（広域）

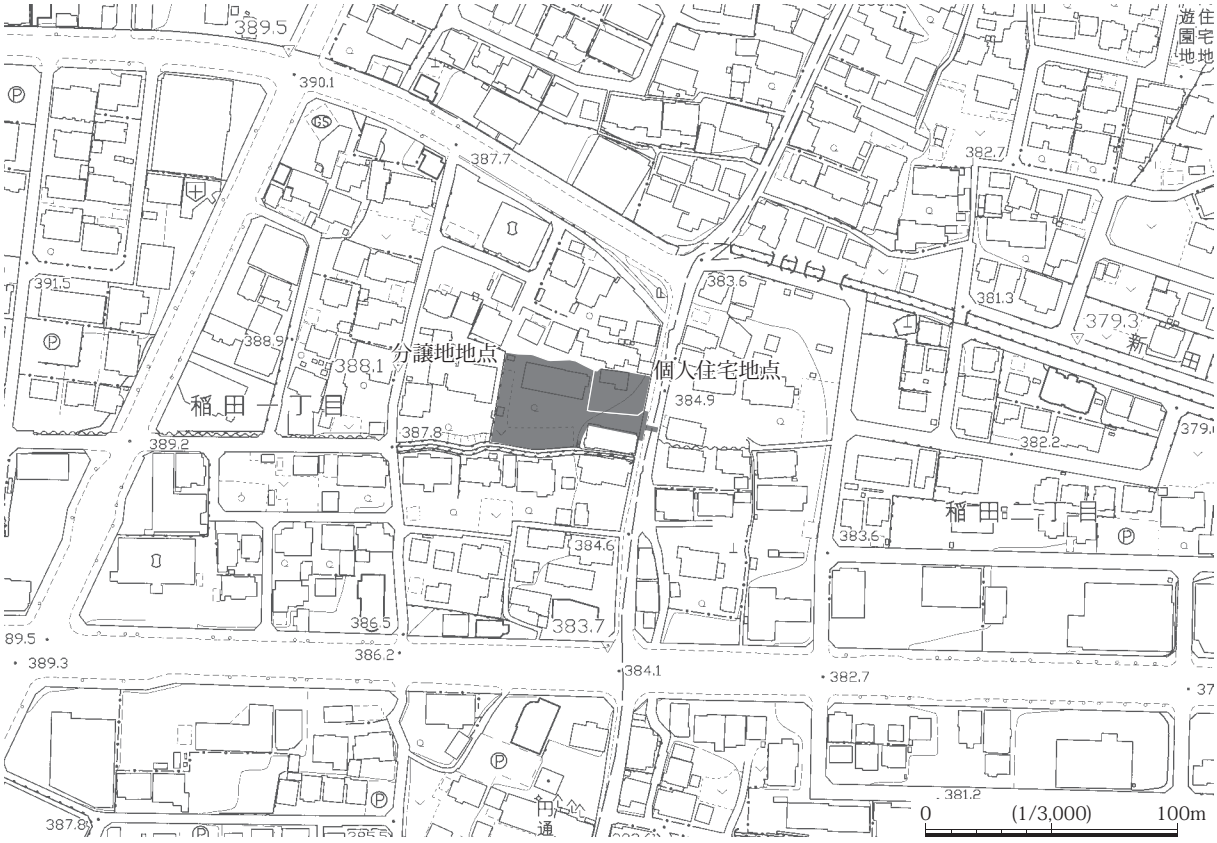


図２　調査地位置図（詳細）

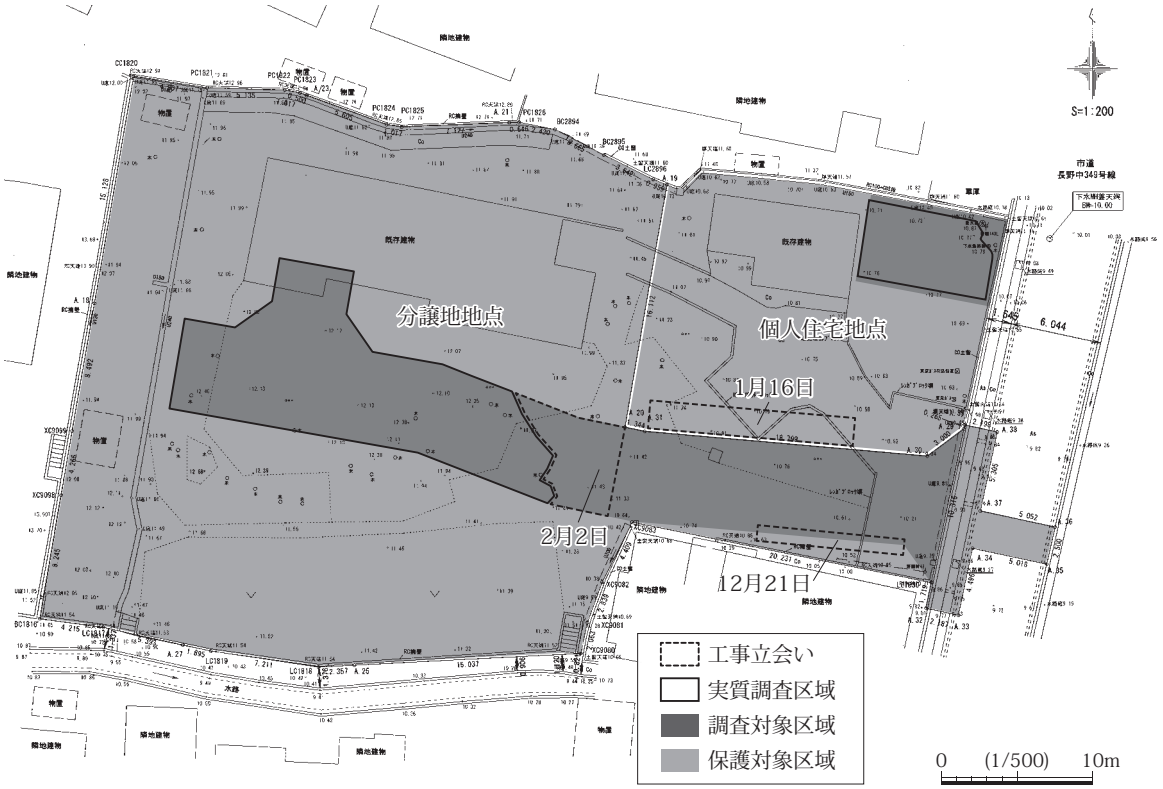


図３　調査範囲図

第３節　調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	丸山　陽一
総括責任者	長野市教育委員会	教育次長	藤澤　勝彦
総括管理者	同　文化財課	課　長	前島　卓（令和４年度）
			石坂　陽子（令和５年度）
調査責任者	同　長野市埋蔵文化財センター　主幹兼所長兼大室古墳館長		大井　久幸（令和４年度）
			飯島　哲也（令和５年度）
調査担当者	同　文化財課（埋蔵文化財センター担当）	課長補佐	飯島　哲也（令和４年度）
			風間　栄一
庶務担当者	同　長野市埋蔵文化財センター	所長補佐	伊藤　慶順（令和５年度）

調査機関　長野市埋蔵文化財センター

庶務担当	主　事	小林　和子（令和５年度）
同	事務職員	宮本　博夫、平林　満美子
調査担当	主事(学芸員)	小林　和子（令和４年度、個人住宅地点主任調査員）
		鹿田　奨之
同	研究員	鈴木　時夫（令和４年度、分譲地地点主任調査員）
		青木　一男（分譲地地点調査員）、千野　浩、
		田中　暁穂、清水　竜太、井出　靖夫、
		山岸　龍二（令和５年度）、
		越志　凪沙（令和５年度）

発掘調査員	向山　純子
発掘補助員	後藤　大地
発掘作業員	植木　義則、大谷　盛孝、月岡　純一、中村　泰明、宮本　正守、向山　久
整理調査員	青木　善子、市川　ちず子、鳥羽　徳子、半田　順子
整理作業員	飯島　早苗、清水　さゆり、西尾　千枝、待井　かおる、宮坂　陽子（令和５年度）、宮島　恵子、三好　明子
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所
重機等現物提供	ミサワホーム甲信株式会社（本体工事請負業者：株式会社井上産業）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

北浦田遺跡が所在する長野市は、飯縄山・戸隠山・黒姫山などの北信五岳を背負う長野県北部に位置し、千曲川の下流に広がる長野盆地の大半と、西側の西部山地、東側の東部山地に市域を有する。市内には約1,100箇所の遺跡があり、本遺跡を含む大多数の遺跡は長野盆地に立地する。

古くから善光寺平と呼ばれる長野盆地は、千曲川と犀川の合流地点を中心にひらけた中央高地内陸部を代表する盆地である。長さ約35km、幅約10km の南西－北東方向に延びる紡錘形を呈し、南端の千曲市稲荷山付近で標高360m、北端の中野市延徳で同330m と、きわめて平坦な地形をなしている。盆地床を構成するのは、中央を北流する千曲川の氾濫原と、東西の山地から流下する河川の扇状地で、大半が後者である。このうち本遺跡は、盆地北部を占める浅川扇状地の扇頂から東へ約２km の扇央部に位置する。調査地周辺の地形は、北西から南東に下る緩傾斜地で、北を流れる浅川支流の新田川と南の澤筋により馬の背状の微高地をなしている。調査前の現況は造成された宅地であったが、それ以前は水田であった。

第２節　周辺の遺跡

市内有数の遺跡密集地である浅川扇状地は、その全域が「浅川扇状地遺跡群」に登録され、これまで多くの発掘調査が行われている（図４）。本節では、浅川扇状地遺跡群およびその隣接地に所在する遺跡のうち代表的なものを時期ごとに概観していく。各遺跡の詳細な内容については報告書を参照されたい。

縄文時代の遺跡は、扇状地扇頂部から扇央部にあたる浅川地区・若槻地区・吉田地区の浅川沿いに点在している。松ノ木田遺跡（４）は、前期後葉・中期後葉・後期にわたるこの時代を代表する遺跡で、玦状耳飾を転用した石製装身具類の生産跡が前期後葉の遺構から検出された。

扇状地の本格的な開発は弥生時代に始まり、三輪地区や徳間・稲田地区など、扇状地両翼にも遺跡の分布域が拡大する。檀田遺跡（５）では、中期後半・後期後半の大規模な集落が検出された。中期後半の集落は、大半が栗林式土器編年における最古段階に位置付けられ、同時期の浅川端遺跡（７）・牟礼バイパスＤ地点遺跡（32）に対する拠点的な集落であったと考えられる。また、礫床木棺墓を含む９基の木棺墓群が居住域に隣接して検出され、当時の集落構造の一端が明らかになった。後期後半においては在地土器とともに多くの北陸系土器が出土した。同様の事象は本村東沖遺跡（10）・長野女子高校校庭遺跡（13）などでもみられ、北陸系土器の流入が本格化する弥生時代末に先んじる共伴事例として評価される。後期初頭吉田式土器の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡（21）では、東北地方の天王山式土器の影響を受けた土器やアメリカ式石鏃が出土した。該期における東北地方との交流を示す数少ない遺物として注目される。なお扇頂部の迎田遺跡（28）では中期初頭、扇端部の国鉄車両基地遺跡（44、笹澤1970）では中期前半と、長野市内では出土例の少ない時期の土器が見つかっている。

古墳時代になると、それまで遺跡の分布が希薄であった扇央部の桐原地区や扇端部の平林地区でも遺跡の分布が認められるようになる。弥生時代末～前期の集落遺跡は扇頂部から扇央部に点在しいずれも建物跡の検出数が少ないが、檀田遺跡・返目遺跡（17）・桐原宮北遺跡（18）・桐原牧野遺跡（19）・吉田古屋敷遺跡（23）・吉田四ツ屋遺跡（24）で方形周溝墓が見つかっている。中期の本村東沖遺跡は該期の拠点集落とみられ、石製模造品の製作工房を含む56棟の建物跡が検出されたほか、多量の古式須恵器や子持勾玉・土鈴などの特殊な遺物が出土し

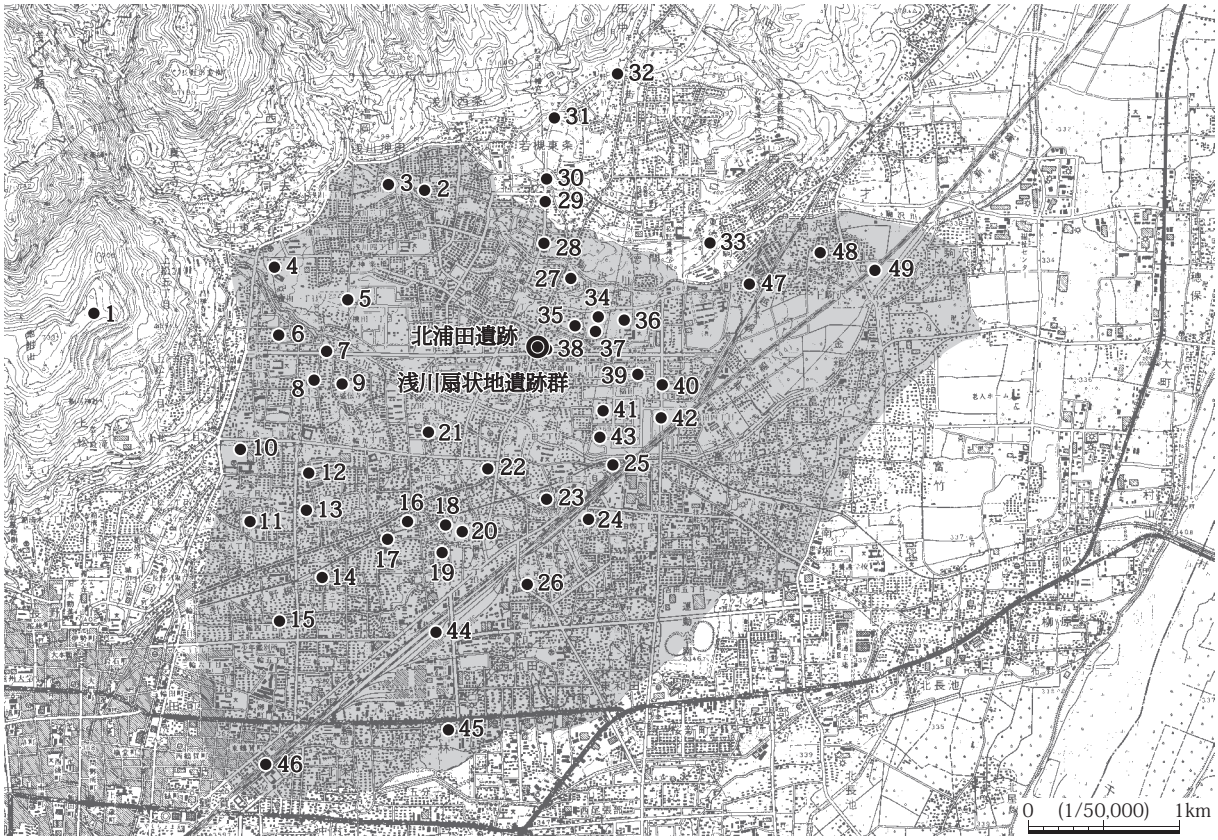
た。集落の存続期間から、地附山古墳群（１）の築造に直接関わった人々の居住域と考えられている。扇端部に位置する同じく中期の駒沢新町遺跡（47）は、５箇所の祭祀遺構が確認され、駒沢祭祀遺跡として一部が県史跡に指定されている。後期は、90棟の建物跡を検出した檀田遺跡を除けば、小規模な遺跡が点在している。湯谷東古墳群（６）は６世紀末頃構築された７基の円墳からなる古墳群で、現在は２号墳のみが残されている。

古代は扇状地全域で遺跡が確認され、特に扇状地北部の若槻地区、稲田・徳間地区、扇央部の桐原地区では比較的大きな規模の集落が形成される。特殊な遺物に、本堀遺跡（39）・牟礼バイパスＣ地点遺跡（31）・同Ｄ地点遺跡の７世紀代に遡る軒瓦や稲添遺跡（38）の平安時代の瓦塔など仏教関連遺物、桐原宮北遺跡の稜椀・双耳杯・円面硯など官衙関連遺物がある。

中世は、各集落遺跡で見つかった遺構・遺物のほか、15箇所の城館跡が知られる。そのうち発掘調査が実施されたのは駒沢城跡（49）・桐原要害（高野氏館跡）（20）・相木城跡（13）の３箇所で、それぞれ堀と考えられる溝状遺構や柵列・掘立柱建物跡などが検出されている。

参考文献

笹澤浩　1970「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第Ⅲ期第23巻第12号、信濃史学会
長野市誌編さん委員会　1997『長野市誌 第１巻 自然編』、長野市



１地附山古墳群（７基）、２浅川西条遺跡、３小板屋遺跡、４松ノ木田遺跡、５檀田遺跡、６湯谷東古墳群（７基）、７浅川端遺跡、８古宇木遺跡、９押鐘遺跡、10本村東沖遺跡、11本村南沖遺跡、12下宇木遺跡、13長野女子高校校庭遺跡・相木城跡、14三輪遺跡、15本郷前遺跡、16桐原宮西遺跡、17返目遺跡、18桐原宮北遺跡、19桐原牧野遺跡、20桐原要害（高野氏館跡）、21吉田高校グランド遺跡、22吉田町東遺跡、23吉田古屋敷遺跡、24吉田四ツ屋遺跡、25辰巳池遺跡、26中越遺跡、27徳間中島遺跡、28迎田遺跡、29牟礼バイパスＡ地点遺跡、30牟礼バイパスＢ地点遺跡、31牟礼バイパスＣ地点遺跡、32牟礼バイパスＤ地点遺跡、33徳間本堂原遺跡、34徳間番場遺跡、35徳間榎田遺跡、36徳間柳田遺跡、37徳間中南遺跡、38稲添遺跡、39本堀遺跡、40二ツ宮遺跡、41天神木遺跡、42権現堂遺跡、43樋爪遺跡、44国鉄車両基地遺跡、45平林東沖遺跡、46東居町遺跡、47駒沢新町遺跡、48上長畑遺跡、49駒沢城跡

図４　周辺遺跡位置図

第Ⅲ章　調査成果

第１節　調査の概要

（１）基本層序

両調査地点で良好な土層堆積が確認できた分譲地地点南壁中央付近を代表に基本層序を示す（図５・６）。

１～３層は遺跡形成後の土層である。かつて水田であったのが昭和40年代以降宅地化されたとの地主の話があり、１・２層が宅地化に伴う造成土層、３層がそれ以前の水田層と理解される。３層はところにより下位の５層まで達している。水田の形成がいつまで遡るのかは確認できていない。続く４層が自然堆積層、５層が遺物包含層、６層が地山層で、６層上面に検出面を設定した。

（２）遺構と遺物の概要

各調査地点の概要は以下のとおり（図６・７）。

分譲地地点　古墳時代前期の竪穴建物跡１棟、古墳時代後期の溝跡２条、時期不明の土坑２基を検出した。また調査区北半では、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて埋没したとみられる自然地形の落ち込みを確認した。出土した土器の総量は約15.7kgである。なお落ち込みについては重機を援用した部分的な掘削にとどめており、ほとんどの遺物は未回収である。

個人住宅地点　時期不明の溝跡３条・土坑２基・小穴４基を検出した。出土した土器の総量は約0.8kgで、時期的には古墳時代後期～奈良時代を主体として古墳時代前期も若干量含むようである。ほとんどが検出面の取り上げであるが、前者については検出遺構の時期をおおむね示しているとみられる。

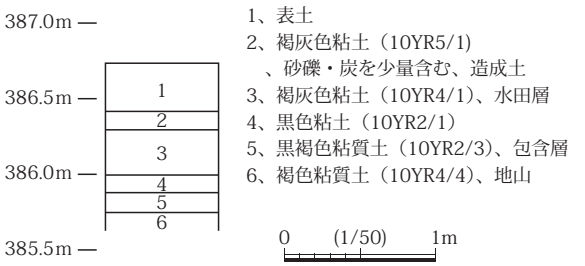


図５　基本層序

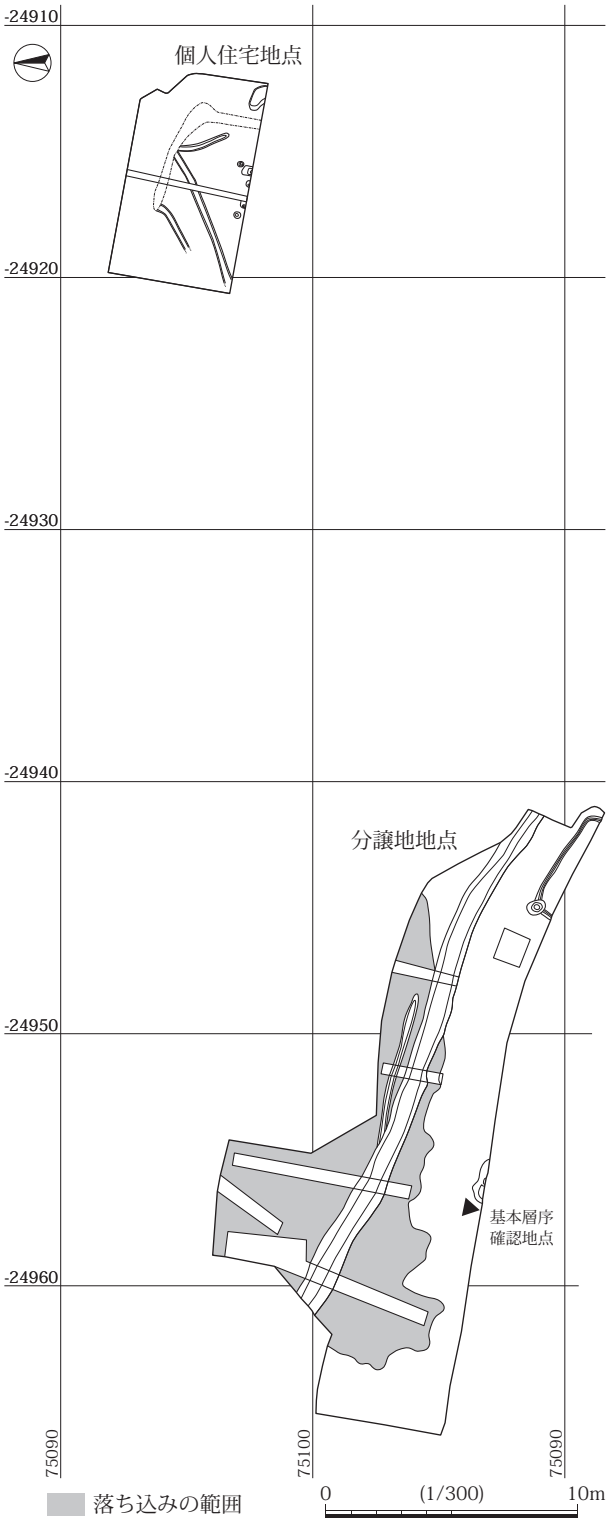


図６　調査区全体図（広域）

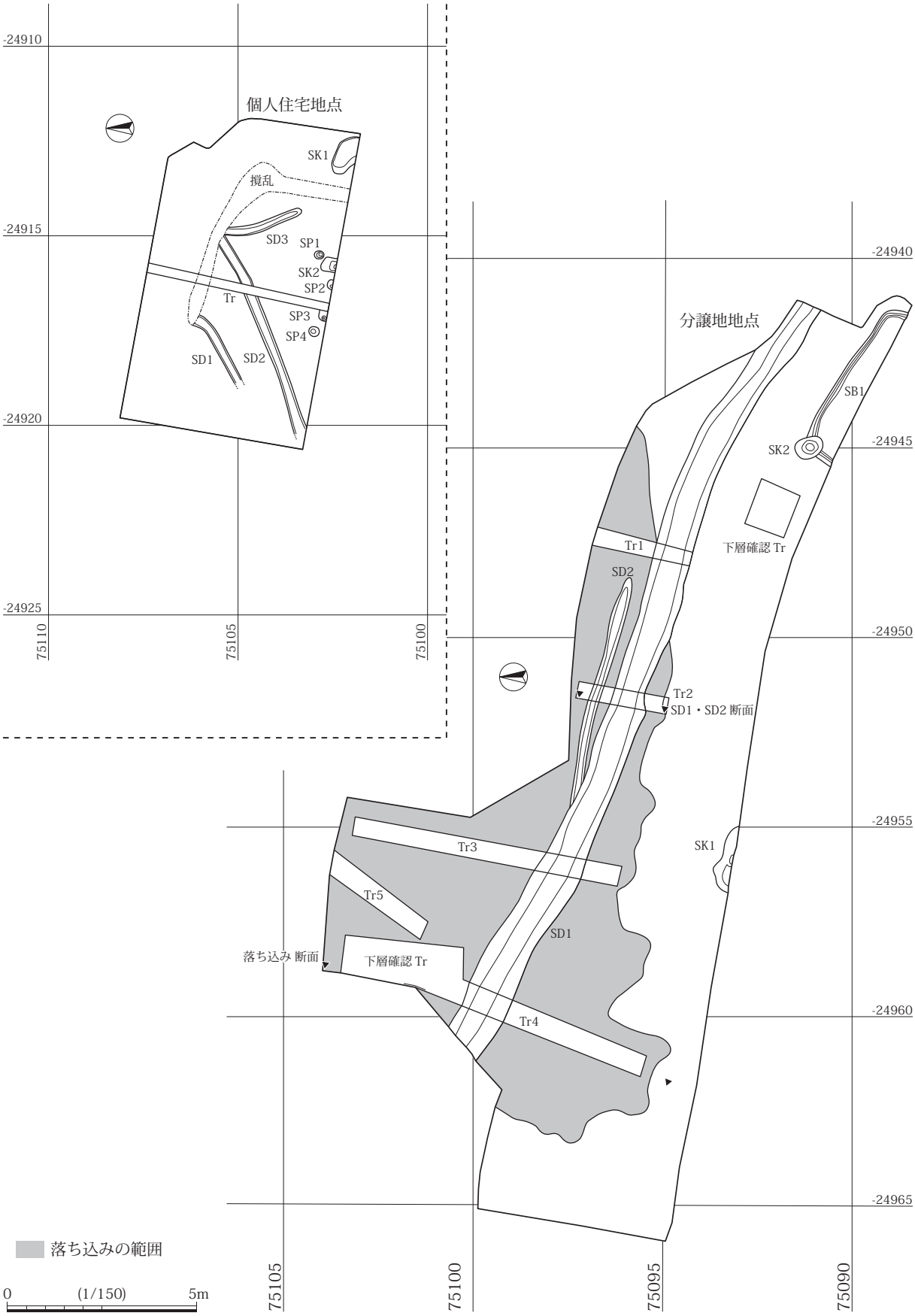

個人住宅地点
SK1
撹乱
SD3
SP1
SK2
SP2
Tr
SP3
SP4
SD1
SD2
-24910
-24915
-24920
-24925
75110
75105
75100
分譲地地点
SB1
SK2
-24940
-24945
-24950
-24955
-24960
-24965
下層確認 Tr
Tr1
SD2
Tr2
SD1・SD2 断面
Tr3
SK1
Tr5
SD1
落ち込み 断面
下層確認 Tr
Tr4
75105
75100
75095
75090
落ち込みの範囲
0
(1/150)
5m

図７　調査区全体図（詳細）

第２節　遺構と遺物

（１）分譲地地点

SB１（図８）

調査区南東隅で検出された竪穴建物跡である。時期不明のSK２に切られる。当初の検出範囲は北隅を含む北東～北西辺であったが、事業者の許可を得て部分的に調査区を拡張し、東隅を含む南東辺まで調査を行った。南側の大半が調査区外にあるが、隅丸方形プランをとるものと推測され、検出範囲は全体のおよそ５分の１と考えられる。検出規模は、対向する辺が検出された北西－南東軸が4.52m、これに直交する北東－南西軸が最大0.93m、壁高は0.18mである。

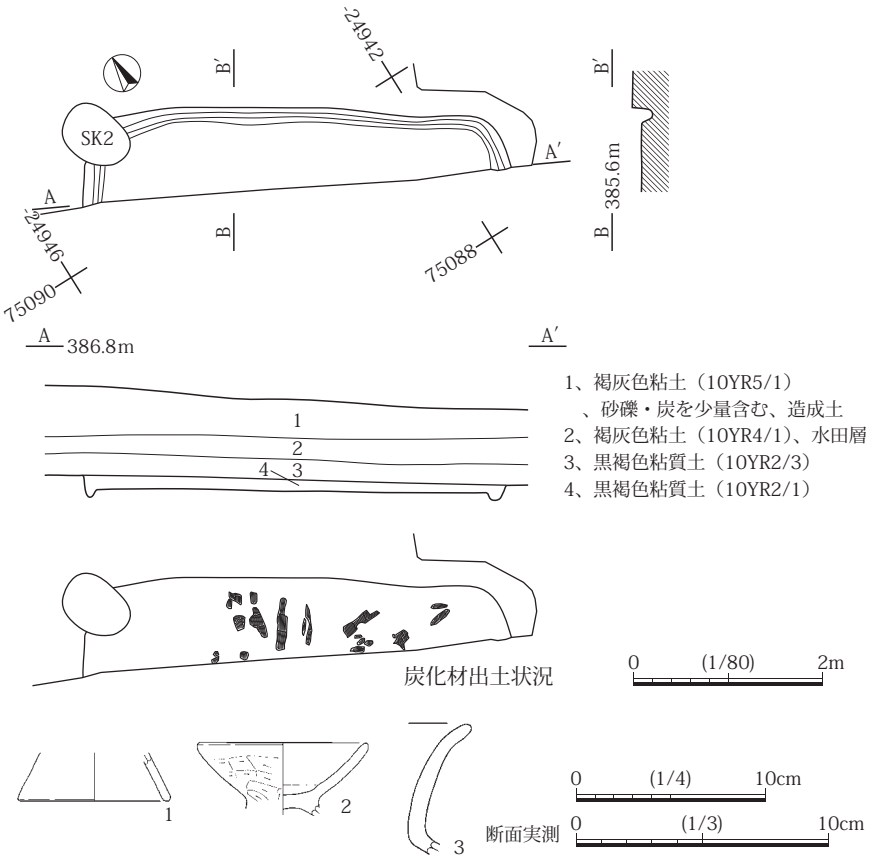


図８　SB１実測図・出土遺物実測図

付帯施設としては壁溝が検出された。壁溝は検出範囲を全周しており、床面からの深さは約８cmを測る。柱穴や炉は調査区外にあるとみられる。床面からは炭化材が検出された。建物跡の中央部を向いて放射状に分布しており、建築部材が焼け落ちたものである可能性が高い。出土土器は580gあり、そのうち土師器の甕（１・３）、器台（２）を図示した。

出土した土器の様相から、本遺構は古墳時代前期後半の所産と考えられる。

SD１・SD２（図９）

SD１は、調査区の東側２/３ほどを北西－南東にほぼ直線的に延びる溝跡である。古墳時代前期までに埋没した落ち込みを掘り込む。両端が調査区外に延びて全形は確認できないが、検出規模は長さ20.7m、幅0.75～1.25m、深さ0.15～0.3mである。SD２はSD１にわずかに斜行して延びる溝跡で、落ち込みを掘り込む。西端がSD１に切られ、検出規模は長さ6.2m、幅0.25～0.38m、深さ0.1m未満である。

出土土器はSD１が約7.4kg、SD２が約0.5kgあり、いずれも古墳時代前期と後期のものが混在している。ここでは、遺存度の高い土器を比較的多く含むSD１から、須恵器の蓋（４）・甕（10）、土師器の杯（５）・鉢（６）・高杯（７）・壺（８）・把手（９）を図示した。

出土遺物からSD１は古墳時代後期の所産と考えられる。SD２は切り合い関係から古墳時代前期～後期の間に置くことができるが、前期の土器を落ち込みからの混入と捉え、後期と考えておく。

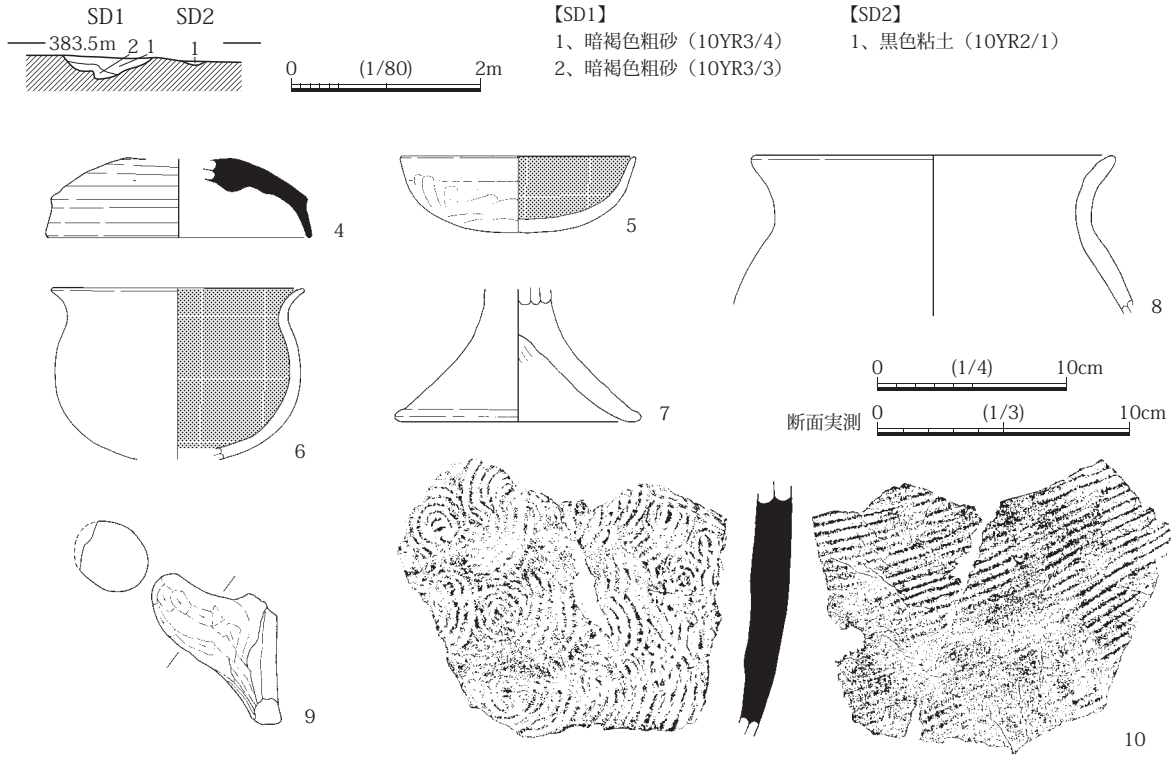
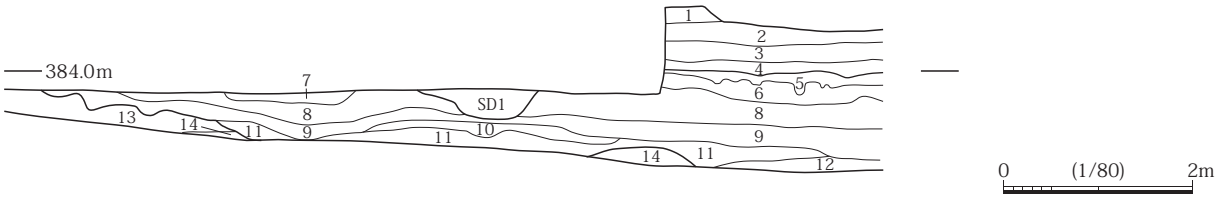


図９　SD１・SD２断面図・SD１出土遺物実測図

落ち込み（図10）

調査区北半に位置する自然地形である。当初は複数遺構の重複を想定したが、トレンチを５箇所（Tr１～５）に入れた結果、北向き斜面への堆積土と判明した。小さなうねりを繰り返しながら東西方向に延びる地山との境界は、調査区内で約18m 確認された。堆積土の分布域は調査区の１/３ほどを占め、上部から SD１・SD２が掘り込まれる。自然地形であることから全面的な掘削は行わず、調査区が北へ突出する個所を部分的に重機で掘り下げ、土層堆積状況を把握することに主眼をおいた。

図10に示した断面図では、５～12層が落ち込み内の堆積土にあたる。ただ、安全性の観点から地山まで露出さ



1、表土
2、褐灰色粘土（10YR5/1）、砂礫・炭を少量含む、造成土
3、褐灰色粘土（10YR4/1）、水田層
4、黒色土（10YR2/1）
5、にぶい黄橙色砂（10YR6/4）
6、黒色粘土（10YR2/1）
7、灰黄色粘土（10YR5/2）
8、黒褐色粘土（10YR3/2）
9、黒褐色土（10YR2/1）
10、黒褐色粘質土（10YR2/2）、φ1cm 以下の礫を含む
11、褐色粗砂（10YR4/4）
12、黒色土（10YR2/1）
13、褐灰色粘土（10YR4/1）、地山
14、砂礫層、地山

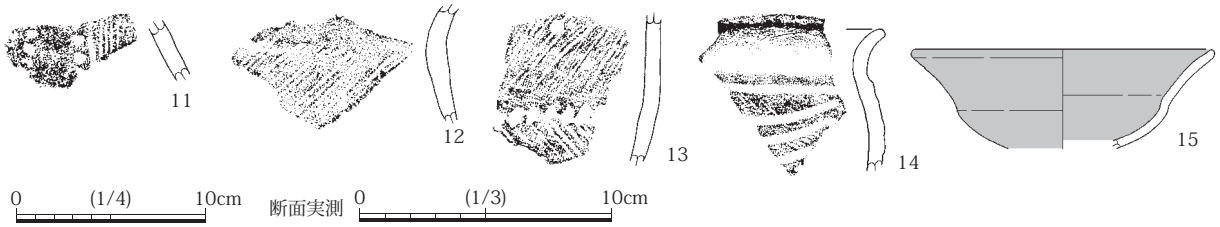


図10　落ち込み断面図・出土遺物実測図

せたのは11層下面までであり、図右側は実際の深さを示していない。出土遺物として、弥生時代中期後半の土器（11～14）、古墳時代前期初頭の土器（15）を図示した。下層ほど古い時期の土器を含有する傾向があり、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけて段階的に埋没したものと看取される。

遺構外の遺物（図11）

16・17はTr４から出土した弥生時代中期後半の土器である。落ち込みに帰属するものだろう。18～23は古墳時代前期の土器である。弥生時代後期に遡上し得る20から前期後半に位置づく22まで時期幅がある。24・25は古墳時代後期の土器である。Tr４から出土しており、SD１に帰属する可能性がある。25は奈良時代に下るかもしれない。紡錘車26は古墳時代のものと思われる。

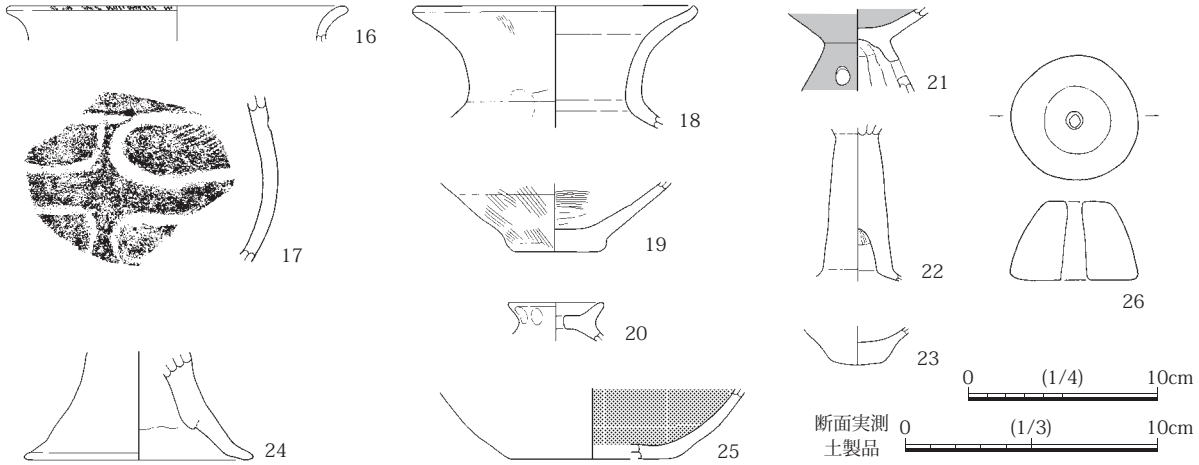


図11　遺構外出土遺物実測図

（２）個人住宅地点

遺構外の遺物（図12）

古墳時代後期～奈良時代の土器を主体として出土し、このうち須恵器の有台杯（27）を図示した。奈良時代と考えられる。

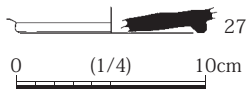


図12　遺構外出土遺物実測図

（３）分譲地地点工事立会い

調査終了後、分譲地地点の道路部分東側において、３箇所の工事立会いを実施した（図３）。

12月21日実施分は、道路北側のＬ型擁壁設置に伴うものである。掘削範囲の南壁を精査し、中央付近で小穴１基を検出したほか、包含層が東へ徐々に下がっていく状況を確認した（図13左）。１月16日実施分は、道路部分南側の既存のＬ型擁壁の撤去に伴うものである。擁壁が設置された際に包含層下30cmまで掘り込まれており、遺構・遺物の確認ができなかった（図13中央）。２月２日実施分は、調査区東側における路盤工およびＵ字溝設置に伴うものである。調査区から継続するSD１を検出し、土器１点を採取した（図13右）。

令和５年12月21日　　令和６年１月16日　　令和６年２月２日

図13　工事立会い写真

表１　遺物観察表

・「遺存」は、図化範囲における残存率を分数で表記した。
・「色調」は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修『新版 標準土色帖』の色名を表記した。ただし「にぶい」は「に」と略した。

図番号	掲載番号	遺構	種別	器種	遺存	色調	成形・調整	文様・備考	取上	実測番号
8	1	SB１	土師	台付甕	１/２	赤褐	脚外：ケズリ、脚内：ケズリ→ナデ		SB１	2
8	2	SB１	土師	器台	１/１	に橙	受外：強いナデ、受内：強いナデ	黒斑	SB１	1
8	3	SB１	土師	甕	—	に黄橙	口縁：横ナデ→ケズリ、胴：縦ハケ→ケズリ		SB１	3
9	4	SD１	須恵	蓋	１/３	灰	ロクロ成形、外：回転ケズリ、内：粘土貼付	内：火脹れ	SD１	4
9	5	SD１	土師	杯	１/２	に橙	外：横ナデ→ケズリ、内：不明瞭		SD１	2
9	6	SD１	土師	鉢	１/３	に黄橙	外：ハケ→ケズリ→一部ミガキ、内：黒色処理→横ミガキ		SD１	3
9	7	SD１	土師	高杯	１/４	浅黄橙	脚端：横ナデ、脚外：縦ケズリ？、脚内：横ケズリ		SD１	6
9	8	SD１	土師	壺	１/３	に黄橙	口縁：横ナデ、外：ケズリ→ナデ、内：ケズリ→ナデ		SD１	1
9	9	SD１	土師	把手	—	浅黄橙	ケズリ		SD１	7
9	10	SD１	須恵	甕	—	灰	外：平行タタキ、内：同心円当て具痕		SD１	9
10	11	落ち込み	弥生	壺	—	灰褐		懸垂文（櫛描直線文＋沈線文＋連続刺突文）	谷	②
10	12	落ち込み	弥生	甕	—	浅黄橙		横羽状文	谷	④
10	13	落ち込み	弥生	甕	—	に橙		横羽状文→列点文	谷	③
10	14	落ち込み	弥生	鉢	—	浅黄橙		横走沈線文、連弧文	谷	①
10	15	落ち込み	土師	高杯	１/８	に黄橙	杯外：赤彩横ミガキ、杯内：赤彩横ミガキ	北陸系	谷	1
11	16	遺構外	弥生	甕	１/４	に橙		口縁：横ナデ、口唇：縄文	Tr４	3
11	17	遺構外	弥生	壺	—	に橙		変形工字文・縄文	Tr４	2
11	18	遺構外	土師	壺	１/５	浅黄橙	口唇：面取り、外：縦ハケ→縦ミガキ、内：横ミガキ		Tr３	4
11	19	遺構外	土師	甕	１/４	に黄橙	外：縦ハケ、底：ケズリ、内：横ハケ→横ケズリ		包含層	2
11	20	遺構外	土師	蓋	１/１	に褐	内：指オサエ、外：指オサエ	蒸気孔	Tr３	1
11	21	遺構外	土師	高杯	２/３	褐灰	外：赤彩ミガキ、杯内：赤彩ミガキ、脚内：横ケズリ	円形透かし３箇所	Tr３	3
11	22	遺構外	土師	高杯	１/１	に橙	脚外：縦ミガキ、脚内：絞り目、横ケズリ		包含層	1
11	23	遺構外	土師	壺	１/１	に橙	外：ナデ、底：ケズリ→ナデ、内：不明瞭		Tr３	2
11	24	遺構外	土師	高杯	１/６	に橙	脚外：不明瞭、脚内：粘土紐接合痕		Tr４	4
11	25	遺構外	土師	杯	１/８	に橙	外：ナデ、底：ケズリ→ナデ、内：黒色処理→ミガキ		Tr４	5
11	26	遺構外	土製品	紡錘車	—	褐灰	ケズリ→ナデ	重量：62g	検出面	1
12	27	遺構外	須恵	有台杯	１/６	に黄橙	ロクロ成形、底：回転ケズリ		包含層	1

第３節　まとめ

今回の調査で得られたデータはきわめて断片的であるが、本遺跡の変遷について見通しを述べまとめとしたい。

遺跡の形成は弥生時代中期後半に始まる。壺11や甕12・13などから、石川日出志による栗林式土器編年（石川2002・2012）の１式には近隣に集落が営まれていた可能性がある。続く古墳時代前期でも後半には確実に竪穴建物跡が存在し。東方の稲添・二ツ宮遺跡（長野市教育委員会1992）などとともに、広範囲に集落が点在したものと推定される。なお、初頭～前半の高杯15・21から、この時期の遺構の存在も予想されるところである。古墳時代後期については、分譲地地点SD１で比較的遺存状態の良い土器が出土しており、竪穴建物跡が近在する可能性が高い。奈良時代については判然としないが、古墳時代後期に継続して集落が営まれたものと予想する。

今回見つかった遺構・遺物の数量は全時期を通じ概して少ない。こうした傾向は調査範囲外においても大きく変わらないと考えられ、局所的にみれば調査地周辺における人々の営みは低調だったと思われる。

参考文献

石川 日出志　2002「栗林式土器の成立過程」『長野県考古学会誌』99・100号、長野県考古学会
石川 日出志　2012「Ⅱ　栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市 柳沢遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100、長野県埋蔵文化財センター
長野市教育委員会1992『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』長野市の埋蔵文化財第47集

調査地遠景（航空写真、東より）

分譲地地点調査区全景（航空写真、上が北）

写真図版 2

分譲地地点全景（東より）

分譲地地点全景（西より）

分譲地地点 SB1（東より）

分譲地地点 SB1 炭化材出土状況（北より）

分譲地地点 SD1・SD2（西より）

分譲地地点 SD1 断面（東より）

分譲地地点落ち込み断面（東より）

写真図版 4

個人住宅地点全景（南より）

図 8 - 2

図 9 - 4

図 9 - 5

図 9 - 6

図 9 - 7

図 9 - 8

図 11 - 21

図 11 - 22

図 11 - 26

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あさかわせんじょうちいせきぐん　きたうらだいせき
書　　名	浅川扇状地遺跡群　北浦田遺跡
副 書 名	ヒルズガーデン稲田一丁目分譲地造成工事 および 稲田一丁目個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第172集
編 集 者 名	清水竜太
編 集 機 関	長野市教育委員会長野市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414番地　TEL026-284-0004・FAX026-284-0106
発行年月日	2024年３月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
浅川扇状地遺跡群（あさかわせんじょうちいせきぐん）北浦田遺跡（きたうらだいせき）【分譲地地点】	長野県長野市（ながのけんながのし）稲田一丁目（いなだいっちょうめ）30番（ばん）42・43・44号（ごう）	20201	A－027	36°67′64″	138°22′09″	20221124～20201212	170m²	宅地造成
浅川扇状地遺跡群（あさかわせんじょうちいせきぐん）北浦田遺跡（きたうらだいせき）【個人住宅地点】	長野県長野市（ながのけんながのし）稲田一丁目（いなだいっちょうめ）30番（ばん）42号（ごう）	20201	A－027	36°67′65″	138°22′11″	20220413～20220420	42m²	住宅新築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北浦田遺跡【分譲地地点】	散布地	古墳時代前期	竪穴建物跡　１棟	土師器	
		古墳時代後期	溝跡　２条	土師器 須恵器	
		弥生時代中期～古墳時代前期	落ち込み	弥生土器 土師器	
		時期不明	土坑　２基		
北浦田遺跡【個人住宅地点】	散布地	古墳時代～奈良時代		土師器 須恵器	
		時期不明	溝跡　３条 土坑　２基 小穴　４基		

要旨	北浦田遺跡は、浅川扇状地の扇央部、浅川支流である新田川右岸の北西から南東に下る緩傾斜地に立地する。宅地造成および住宅新築に伴い隣接する２地点で調査を行い、古墳時代前期・後期の集落跡、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて埋没した自然地形の落ち込みなどを検出した。見つかった遺構・遺物の数量は全時期を通じ少なく、調査地周辺における人々の営みは低調だったと思われる。

長野市の埋蔵文化財第172集

浅川扇状地遺跡群
北浦田遺跡

令和６年３月29日　発行

発　行　　長野市教育委員会
編　集　　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　　大日本法令印刷株式会社